

Pichari ~ ピチャリ ~

七飯町歴史館だより

第149号

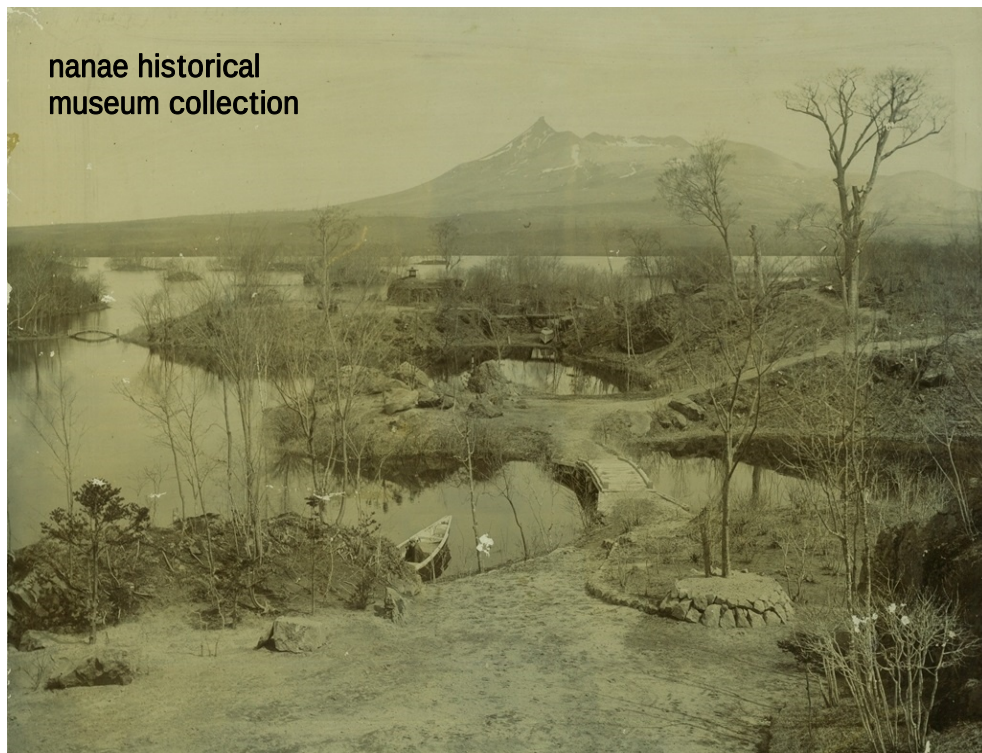
ななえ古写真物語 VOL. 149

大沼公園改良案

ドクトル本多の残したもの

明治末～大正初期か？

大沼地区



明治37年、北海道議会の決議を経て大沼は、道（道庁）立公園指定をめざすことになり、道庁参事官だった横山隆起により「大沼公園創立案」が道会へ提出された。大沼の本格的な公園化はこの時始まったと言ってもよいだろう。翌年から道路の開削や公園看守所を設置するなど、整備活動が盛んとなったが、大正2年に北海道は本多静六林学博士に、大沼公園の設計を委嘱。本多は翌3年8月に大沼に訪れ『大沼公園改良案』を提出した。

巻頭言には、「予ハ予ノ本務タル造林学研究ノ余暇聊カ森林美学ノ応用トシテ各地公園ノ設計ニ膺リ其数已ニ大小数十二達セリシト雖モ其事タルヤ所謂道楽トシテ為セシニ止マリ深ク斯道ヲ専攻セシニ非ザレバ・・・」と、あくまで公園設計の専門ではなく、森林学の観点から応用したものであるとしながら、浅学ではあるが改良や施設などの指針となればと考え引き受けたと述べている。

改良案については、ピチャリ第53号でも触れているが、その時はなぜ林学博士が公園設計を行うに至ったかピンと来ていなかったが、「本多静六自伝体験八十五年」という本にその答えが記されていた。

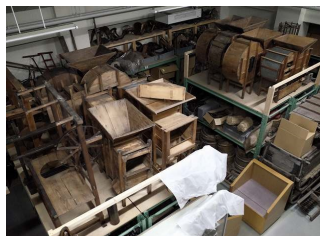
東京大学教授でありながら、大富豪という顔も持ち合わせていた本多の生い立ちについては本書を読んで頂くことにして、特筆なのは財産のほとんどを名乗らない形で、寄付にあてていること。蓄財を子孫のためではなく、社会へ還元する道を選んだのである。考え方によっては、小遣いのように見知らぬ人々にお金を配るよりも、はるかに多くの人へ利益を分配する行為である。子どもの頃から、財政的に苦しい暮らしをしていた本多だからこその決断かも知れないが、なかなかできることではない。数多手がけた公園設計にしても、自らの利益と名声の為ではなく、当事者の熱意によって動かされた本多が、自分の出来る範囲で行動した結果だったようである。

そんな本多が大沼公園改良の大方針として掲げたのは、もっぱら天然の風景並びに美点の利用を本旨とし、わずかに人工を加え単調な景観にアクセントを与えることで、その内容は7章約50ページにもわたって記されている。

上の写真は、本多が訪れた頃の大沼の景色だと考えられるものののだが、もし現在の大沼を本多静六が見たら何を思うのだろう。写真を見ながら、そんなことばかり頭に浮かんできた。

収蔵庫とは

収集や寄贈された資料を、調査・展示・公開するまでその出番を待っている場所。それが収蔵庫です。近年、博物館や美術館でも「バックヤードツアー」といって、学芸員などが解説を交え、案内を行っています。さて、当館の収蔵庫内部は、右の写真です。一階部分と二階部分に分かれており、一階は、大型の農具を中心に、二階は、生活道具を主に保管しています。管理をする上で、温度や湿度のチェックをはじめ、資料に影響する虫などの害虫やカビ、災害などに備えての収蔵方法など、多くの管理項目があり、収蔵庫に入るまでには、いくつかの作業があります。データベースに来歴などの情報を入力し、サビや汚れがあるものは、きれいに落とし、必要なものは修復をし、防腐剤などの薬品を塗布することもあります。その後、資料番号を注記し、撮影をしたら収蔵庫へ納めます。町の文化財を、後世に伝えるための収蔵庫は、光の当たらないところで、静かにその時を待っている場所でもあります。



本を読もう！

学習サービス室の所蔵図書は、他の図書館と少し趣きが異なります。本屋に平積みされているような流行りの本は、あまりありません。だからといって、難しい専門書ばかりでもなく、児童書をはじめ、自然や科学、民俗の分野など、知識の入り口になるような図書を選定し、置いています。現在は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、滞在時間の制限をお願いしていますが、短時間で読める図書もたくさん置いてあります。ご来館の際には、是非お立ち寄り下さい。



6月の予定

1	月	新収蔵展
2	火	
3	水	
4	木	
5	金	
6	土	
7	日	↓
8	月	
9	火	
10	水	
11	木	
12	金	
13	土	
14	日	
15	月	
16	火	
17	水	
18	木	
19	金	
20	土	ジュニア探検クラブ
21	日	
22	月	
23	火	
24	水	
25	木	
26	金	
27	土	
28	日	
29	月	
30	火	

6月の休館日はありません。

りんこの花

「花林檎」という春の季語があるりんこの花。つぼみから花弁が開くまでの、色の変化はまさに初夏の訪れを感じます。



編集後記 ~tawagoto~

先日フィールドで、離れた梢に鮮やかな色があることに気付いた。オオルリである。真っ白な腹、頭から背にかけて金属光沢のブルー、まるでドラえもんである。しばらくの間見入っていたのだが、一向にさえずらなかつたので、近づいてみるとどこかに羽ばたいていった。その後、車で別の地点へ移動し、再び歩きはじめると、目の前にまたオオルリが、もしかしたら、森にとって不審者である私を監視していたのかもしれない。（やまだひさし）

Pichart

～ピチャリ～

第149号

令和2年5月20日発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail: rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp